

人間線上

一切の人間を人間線上にまでひき下ろせ。

一切の人間を人間線上にまでひき上げよ。

そうして「おい兄弟よ」とよびかけよ。

どこに人間の上に人間があるか。

どこに人間の下に人間があるか。

大地の上は日に日に荒む。そはいつたい何故なのか。

限りなくのびゆく唯物主義の末路よ。いかなる高級な哲理も、それが人間の赤い血潮を認めず、熱い涙を眼中におかないものであるならば、限りなく人間生活を建設しようとする者に満足を与えることは出来ない。

豊かなる情操の流れ、深い靈性の潤い、それは生きた人間生活の本質ではないか。「豊かなる情操の流れ」において兄弟の自覚をつくれ、深い靈性の潤いによつて結ばれて一つになれ。

いかなる悪人も兄弟である。いかなる患者も兄弟である。

先頭の一人も人間であれば、最後の一人も人間である。

優等生だけが有用な人間で、劣等生を眼中におかない教育、それは永遠の相において考えられた教育ではない。

富める者も人間線上に下りよ。学べる者よ人間線上に下りよ。

下りて貧き者、弱き者、愚なる者の光となり、

哀れなる者、寂しき者、虐げられたる者の友となれ。

謙讓なる礼儀と、豊かなる心情と、自由なる空気が、人と人とを一つにする。明るい世界は低い谷間に待っている。

真の救いもこゝにある。真の道もこゝから開ける。

真理は低き世界で人間の手に渡される。

悲劇に咲く人情の花

お浜は父幸蔵と共に、伊豆のある小さな港で、漁業に従事しつつわびしい日暮しを続けている。毎日く大平洋の大波は伊豆の岸边を洗っている。寄せてはかえす大波小波の音さへかれらにとつては暗黒な人生の呪いの余音にしかすぎないやうであつた。

何故お浜親子は暗かつたのか。それはこうである。お浜には一郎という一人の兄があつた。一郎はある事件のために友人達の犠牲になつて獄裡の人となつていた。浜の人たちは彼らの一郎が刑務所に入れられてからは、罪人を出した一家、前科者の父だ妹だというので誰一人相手にしてくれる者もなくなつた。畜生のように、悪魔のように、馬鹿められ、虐げられて、親子はただ無念の日を送つて行かなければならなかつた。

こうした意味で虐げられている人が天下に満ちてはおるまいか。

一人の兄の墮落が、多くの兄弟を暗い世界につき落す。四十年前に殺人犯を出した一家に今でもまだ嫁にくる者がない。

人間の無智が迷信をつくる。その迷信の一つに「犬神」というのがある。犬神のおる家柄と一度世間から言われたら、全く特殊なる階級として結婚さえしてくれ手がない。広島県下この迷信のために如何に多くの家庭が暗黒なる世界におしやられたか。

口を開けば愛を叫ぶ。おゝ愛とはいつた何の意味する。弱く虐げられた者と共に泣く純情ではないか。彼らのこうした暗い生活にもたつた一つの憧憬があつた。2それはお浜の弟二郎が、今東京に於て勉強している。その二郎が近い内に、この浜でたつた一人の学士になつて帰つて来るのだ。

「お浜よ。二郎が学士さんになつて帰つて来たら、おれたちを馬鹿にした奴等を見かえしてやるのだ。今に見てをれ……今しばらくの辛抱だ。」

それが彼らのたつた一つの光明であり、慰めであつた。

無情な港の人たちの間にも、青年勇二だけは、お浜一家に同情した。勇二は一家のよい友であり、相談相手であり、助力者であつた。二人は勇二によつて慰められる。

人情の花よ 我は汝の神秘をたゝえる

深山の奥の賤家にも 機械の音する工場の中にも

苦惱にたゞれた地獄の底にも 罪を裁かれる獄窓にも

食うにも困る餓鬼道にも 全て人の子の世界には汝の花は開いている。

汝の肥料が涙なのか 汝の涙が花なのか

汝のある所に涙があり 涙のある所汝が咲く。

お浜と勇二が同情からやがて恋する仲になつてしまつたのももちろんであつた。学士になつて帰つて来るはずの二郎にあてた手紙が、受取人不明で返つて来たが、彼らは二郎を疑わなかつた。二郎の出世と、勇二の同情、それが、この寂しい親子の生きてゆく光であつた。

お浜の姿は美しかった。小さい港の男たちは、お浜の姿にひきつけられた。その中に、権勢をふるう網元のせがれ正一は、意地悪く、嫌ふお浜をつけねらい、妻になれと求めた。

正一の横恋慕は、勇二の心に誤解を与えた。お浜が泣きながら言い訳しても、勇二の誤解をとくことは出来なかった。そうして勇二までが、お浜一家を辱めはじめた。「お前ばかりはと思っていたが、やはり血というものはあらそわれない。前科者の一家はやつぱり腐れていた。よくも俺を裏切つたな。」

この言葉は、可憐なお浜を暗闇のどん底につきおとすには十分であった。父の幸蔵はこの悲しいお浜の訴えに逆上した。そうして自暴になつた勇二が居酒屋で酒を飲んでゐる所に行つて、勇二の心をたしかめたが、疑いの心から失望の無念に変わってしまった勇二の心は、幸蔵にさえ侮辱を与えた。幸蔵は勇二に向かつて、棒をふりかざしてぶつてかかった。しかし幸蔵は年来、心臓病が持病であつたから、若い勇二の敵ではなく、彼はにわかな病の発作に苦みつつ、我家にかへつた。帰つた時は、彼が東都の二郎のことを思いつつあの世へと旅立たねばならぬ死の時であつた。

可憐なるお浜は今、恋人勇二に去られ、命の綱とたのむ父親に逝かれて、天涯孤独の寂しい身となつた。彼には慰さめる人もなかつた。力とたのむ人もなかつた。しかしまだ彼女にはたつた一つの希望があつた。それは弟の二郎が法学士となつて帰つて来る日待つことであつた。

度々けがらわしくも言い寄る正一に見むきもせず、黙々として働くお浜のすがたは大海を背景にこの小さな港にあはれにも咲いた悲しい華であつた。

ある日の夕方、彼女が浜から我家にかへつた時、思いがけなくもそこに、弟の二郎を発見した。しかし二人の間には決して喜びの笑顔は生れなかつた。みすばらしい二郎の様子、浮かぬ暗い顔色は一切を雄弁に物語つていた。

「姉さん………僕はすまないことをしました。待つてゐる姉さんの期待を裏切つてしまいました。悪い女にかゝつて、とうとうこんなすがたに墮落してしまいました。」

見る／＼お浜の顔色は変つた。

悲歎！ 絶望！ 憤怒！

彼女は遂に一切を失つたのだ。恋人も、父も、弟の上に盛られる名誉も………長い一生には一度や二度はこうした八方ふさがりの日が来ることもある。そこだ！ じつと忍べ、泣いてもいい、じつと忍べ。短気をおこすな。きつと新らしい世界が待つてゐる。信仰も、信念も、修養もここを通らねば、ほんとではない。

お浜は手に太い綱をとつて、二郎の頭といわず背といわず、打ちのめした。二郎は決して去らなかつた。お浜は二郎を父の位牌の前に引き出して、父の死を物語つた。学士になることばかり待つて死んだ父のことを聞いて二郎は、

「姉さんの心のすむまで打つて下さう。」

と泣きつつ彼の過去を悔いている。どんなにいつても兄弟は兄弟である。お浜は折角帰つた二郎を責めたことをわびて、

「二郎さん。ゆるしておくれ、私が悪かった……：……：学士にならなくてもいいのです。私はたった一人ぼっちです。二人は仲よくして、この港で力を合せて暮らしましょう。私たちは不幸な生れつきなのです。」

二人は手をとりあつて泣いた。しかしその翌朝、お浜が目をさました時は、そこには二郎の姿は見えなかつた。「僕は勉強のため今一度上京します。」との書きおきが寂しく残されてあつた。彼女は弟の決心を知つた。

その頃になつて勇二は、幸蔵を自分が間接に殺したのであることを思い、正一とお浜の間が自分の誤解であることを知つて、自ら悔いていた。そうしてお浜にやさしくしようとしたけれど、お浜の心の傷は癒されなかつた。

二郎が再度上京してから間もなく、お浜のすがたはこの浜から消えた。彼女は東京目ざして二郎のあとを追おうとしたのだ、しかし船中で彼女は、悪党らのために誘惑せられて、人生の暗黒巷にひきずられてゆく。

獄を出でた一郎は人目をしのいで、我が家に帰つたが、そこには父も妹もいなかった。世をいとう彼もまた故郷にいたことは出来なかつた。

山田博士の豪壮なる邸宅では、令嬢香代子の誕生日を祝すために男女の友人が集つて、手をとつてダンスを興がっている。博士の書生となつてゐる二郎は今も又、以前に彼を墮落の淵につれこんだ魔性の女性お静から電話がかゝる。毒蛇のように彼につけねらふ。お静はカフェーの女給である。令嬢香代子は電話を室外で聞いて、心配しながらうち沈む二郎を慰める。「暗い過去」それがどれほど二郎を苦しめるか。4

二郎は博士によばれた。そうして意外にも、令嬢香代子の婿養子になつてくれと求められた。しかし暗い過去を持つた彼は、それを承諾することは出来なかつた。彼は暗い過去があるからとてその求婚を拒絶したが、博士は「自分たちが求めるのは、君の過去ではなくて、君の現在であり、将来である。」とて、どこまでもその承諾を得ようとした。香代子が二郎を恋しているのももちろんである。

その夜である。二郎は仕方なく、魔性の女お静がいるカフェーに行つた。もとより二郎はお静の心には従わない、しかし蜘蛛の精のようなお静は決して二郎を山田博士のもとで香代子の手には渡さないとおどす。

その時、すこし離れたテーブルには兄の一郎が、この様子をじつと聞いていた。二郎が出てゆくと一郎もそのあとを追うた。

二郎はうち沈んで邸にかへつた。二郎と香代子の影が窓にうつる。暗い顔をした二郎は香代子によつて慰められる。そうして結婚の承諾を求められる。香代子は決して二郎の過去をとがめなかつた。二人はとうく結婚することに決心した。一郎は窓の外でこれを聞いた、そうして二郎のために唯一の障碍物であるお静をとりのぞいてやろうとする。

絵のように美しい下田の港には出る船入る船の足も繁く、それらに乗せられた船員たちは上陸する度毎に、酒と女とのある世界に人生の疲れをせめて享樂によつて慰めようとしている。

不幸な女性お浜は今やこうした人たちを相手にするあるカフエーに女給となつて
いる。弟二郎のあとを追うて上京しようとして悪党たちのために誘惑されて、暗い世
界にひきづりこまれてからは、流れ／＼て下田に來たのであつた。お浜はもう、純な
田舎娘ではなかつた。客の機嫌をとることを知つていた。ビールをあおることも平
氣でした。花に蝶が集るように、多くの女給たちの間でお浜には多くの男性が集つて
來た。このカフエーに二郎を墮落せしめたお静も流れて來ていた。お静は多くの男
性がお浜に集まるのを見てお浜を嫉んだ。

ある日このカフエーに、お浜の以前の恋人勇二が來た。勇二はお浜がいなくなる
や、船員になつてお浜を探ねはじめたのであつた。勇二はビールに酔いどれてとてつ
もない乱れ方のお浜を見た。そうしてお浜に語りかけた。しかしお浜は昔のお浜で
はなかつた。「そんなこともありましたが、しかし前科者の妹のあとを男らしくも
なくおわなくなつたつて、世の中には女はいくらだつてありますよ。」とて相手にしな
かつた。多くのよいどれたちは二人の對話を氣にしていたが、とうとう勇二を外につ
き出して顔に怪我をさせてしまつた。勇二はこの次に船が港に入るまでいてくれと
たのんで出て行つた。

その翌朝、お浜などの仲間のお雪は、弟の病氣の治療費のために二百円の前借で身
を売つて北海道へ出てゆく、それを港に見送つたお浜は、はからずも、船の上に働い
ている勇二の姿を見た。思い思つた勇二がどうして忘れられよう。

「勇二さん……許して下さい。あなたのお心はよくわかつています。私がいな
くになると船員になつて港から港に私をたづねて下さるあなたのお心はわかつていま
す。しかし私は昔の純なお浜ではありません。今となつてはどうもならない体です。
あなたが再びこの港にはいつた時、私はこの港にいないかも知れません。どうぞお大
事になさいます……。」

人知れず、波止場に立つて泣くお浜の心は勇二に知れようはなかつた。

恋は地上の解けない謎である。恋せぬ男もなく女もない。真剣な恋、不真面目な
恋、地上の若き日は全て恋を中心に彩られてゆく。

失恋は若き日の苦杯である。真剣な者だけ深刻である。失恋の先には二つの世界
が待つ。地獄への門か、浄土への門か、そは実に人生の危機である。

ある朝、お浜は弟二郎の写真を出して懐しく見入つていた。勉学を誓つて出た二郎
が山田博士の養子になつてゐることは彼女には知れていなかった、しかしお静がこの
写真を横取して、二郎であることを知つて、昔のことや、現在の二郎の身の上を物
語つた。お浜は、はじめてお静が二郎を墮落せしめたのであることや、現在二郎が立
派な身分になつてゐることを知つた。

その夜である、このカフエーに狂乱の場が酔いがまわるにつれて描き出された頃、
一人の船員が入つて來た。しつかりした年頃である彼はお浜の兄二郎であつた。一
郎は近頃評判のお浜が、我が妹であることを知るやお浜を捕らえて、怒のあまり、帯
皮をといしてお浜を打つて／＼打ちのめした。しかし彼らとても兄妹である。やがて
彼らは相抱いて泣いた。そうしてお浜をこうしたのも私が前科者になつたからだと

て、お浜をいたわった。一郎は二郎のことについて語った。彼らは一緒に東京に二郎を訪ねて行くことに相談が一致して下田を出てしまった。

お浜が下田港を出てから後、勇二はこの港についた。襟やその他の土産をお浜に買って上ったが、「もうお浜は下田を出て、上海に行った」というお静のいい加減な言葉聞いて力をおとし、「海の波よ心あれば、お浜の所にこの心を送れ」とて土産の品を海に棄てる。

堂々たる洋館の中に、博士の養子、美しい香代子の婿と定つた二郎は幸福であつた。しかし彼は伊豆に寂しう暮しているはずのお浜のことが忘れられなかつた。香代子やその他の友人たちと伊豆への旅行中、船中で故郷の沖を通つた時、人知れず故郷の空をながめて涙したこともあつた。香代子は彼に同情して一緒に訪問しようと言へ言つたけれど、それは出来ないことであつた。東京からお浜あてに二人が出した小包はその昔、お浜の手紙が返つたように受取人不在の由で帰つて来た。

一郎とお浜は東京につくと、山田博士の邸宅を訪れた。「二郎若旦那は御在宅で御座いますか。私は一郎と申す者で御座いますが、御在宅ならば会わして下さい。」と云えば、玄関番は「今、新婚旅行のために出発されました。……汽車は十時半のや……」今が十時、発車まで三十分あつた。一郎たちは、自動車を飛ばした。ややつと東京駅に着いてみれば、発車間際であつた。愛する二郎は多くの貴顕紳士淑女に見送られて、華やかな別れをかわしていた。お浜は人をおして、二郎に近よううとしたが、兄の一郎はそれをとめた。そうして

「二郎の幸福をかきみだしてはならない。彼はお前が待つた学士になつたのだ。立派な人になつたのだ。せめて二郎の幸福を祈ろう。前科者の兄と、汚れた女の妹とは一緒に二郎の幸福を所りつつ、共に一緒に生きよう。」

二郎と香代子は一等車に乗込んだ。そうして静かに動き出した。二人の兄と姉とが見送っていることも知らず。寂しい二人の目には涙が光る……

(映幕「海に叫ぶ女」を見て)

他人の幸福を切念して、暗の底に合掌する心、そは寂しい人生に於ける深い愛の相である。

この心事の了解出来ない親に、学校教師に、宗教家に、芸術家に、そして一切人に、本当の人生生活があり得ようか。

人生は果しなく実演されてゆく劇である。

寄せては返す波のように、はてしなく地上に綴られる無明の悲劇に、我を動かす者はそもく何ぞ！

高級なる哲理か、複雑なる科学か、はた又靈性に根ざす人情の花の香か。

汝自身を知れ

若さの特権

太鼓がなる、若人たちは、鳴物に浮き立って踊りつゞけている。見物の人が増すにつれて彼らはその熱度を高める、太鼓をたたく人のあの熱狂さを見よ、踊る若人たちのあの感激を見よ。歌の詞の中に天上の言葉が織りこまれてある時、彼らは足を下界からはなして、天上の人となる。歌の言葉に、聖者を讃める言葉が表れる時、彼らは、真理を奉ずる使徒のように酔わされる。彼らの中には、涙さえ浮べている。真剣、尊厳、敬度、相愛……あらゆる美しい言葉が彼らのこの異常なる空気の象徴であるかのように、その壁にはられてある。彼らは没批判の感情に虹のような美しい化城をつくりつつ、なおも歌いつづける。幸なるかな、若人たちよ。感激は青年の特権である。乱舞の上層には、病根の一切は一時その相をひそめる。

そこには又、選ばれた、奉仕の一隊がある。集った百名の処女会員たちは、懺悔奉仕を形から教えられる。二人一組の彼らは、教えられた通りに街の商家を一軒づつ便所の掃除しつつ歩いて行く。たった三日間を極端に粗末な服装と、食物に満足しつつ、さながら更生せる聖者の如く感激しつつ、この奉仕感謝の講習に多忙である。

おお、三日間に出来る驚くべき小聖者の数よ。その能率よ。かくして彼らは幾月の間を小聖者たり得るか。

静かなる心

太鼓と共に踊り狂って使命に生きるという青年たちよ。懺悔奉仕を学べる小聖者の処女たちよ。熱狂と感激の三日間を終って家路につく時、果してその心中はにぎやであろうか。おん身は何時までも幸福であり得ようか。

静かなる夕、浜辺に立て、沖に広い海が見える。

油のような静かな海のゆらぎが何を私に教える。

静かなる朝、谷間に草刈る鎌の手を中止せよ。

千年の老木は、汝に何を教える。

雄々しい太鼓の響、美しい舞い踊りの国、それは果して汝の真の国だろうか。

人生には笑いがある。笑い得ることは人の特権である。しかし笑って／＼笑いころげた次に、死のような寂しさはないか。私はこのにがい寂しさのために今日もまた泣いている。

「静かなる心」その汝の心の本国に帰った日、汝の内には何を見出すであろうか。そこには、疲労と寂しさと、言いようのない空虚とが残されてはいないか。

この寂しさ、空虚さを知らない間、汝らはまた太鼓の音の下に集って生命の自慰をつづけるであろう。

乞う、まず静かなる世界にかえれ。

軽卒なる世相

青年指導、処女教育、青年訓練、学生思想善導、それ等の問題のために、指導階級の人たちが頭を悩ます。彼らはある時、体育がその中心だと考えた。ある時は労働作業がその中心だと考えられた。ある時は修養だと教えた。到る所に修養の講習会が開かれる。近頃の声は「宗教中心」であるらしい。

驚くべき功利的な利用論者たちよ。「宗教が必要だ」何という浅薄な考え方だ。宗教の必要を認めて三日間に、修養や、青年団指導のために、宗教を知ろうとする浅薄な考え方よ。芸術がもし高調される日、彼らは、又宗教を棄てて、芸術教育に三日間の講習を受るであろう。

宗教的生活に交渉を持たぬ大臣や次官が宗教の必要や利用を論じたり、金よりほか眼中にない資本家が宗教を職工の上に利用したり、青年団指導に、小学校長が急造の宗教家になったり、あまりにも軽率な世相ではないか。

倫理道徳も、宗教も、芸術も、体育も、それは決して人間の心の外皮ではない。衣服ではない！化粧ではない！又、一時の流行物でもない。

湧く泉は、清くして、つぎることがない。汲みこまれた水は、その刹那が一番清く、時を経るに従って汚れはじめ。そうして間もない内に蒸発してしまふであろう。

倫理道徳も、宗教も、芸術も、それらは人間の生命の命であつて、三日間の講習で汲みこまれる水であつてはならない。

しかるに青年や処女を治めるために利用されるそれらの運動に、どこに本質的価値と力とがあるであろうか。ある時は体育にひきづられ、ある時は修養の太鼓に、次には宗教に変わり移つてゆく所、それこそ単なる流転ではないか。

髪をきれいに結び、お化粧して、襦袢に単衣に足袋、それに大きな帯を胸の上にお太鼓にしめて、キチンと整える。いうまでもなくそれはよそ行きの姿である。歩き方、座り方、話し方、それまで型のように、話をして言葉数が少い。よそ行きの姿は美しい。しかし長く続いたら疲れてしまふ。

よそから帰つたら帯を解く。足袋をぬぐ、軽い浴衣がけになつて足さへのぼして風を入れる。父がいても母がいても、何の気がねも遠慮もない。

宗教や道徳は、よそ行きの衣裳をつけ、他人行儀の固苦しさに身を堅めることだろうか。それとも人間性のそのただ中に生れる、生命の力そのものなのだろうか。

道は決して型ではない。他部を美しく装うことではない。道は直ちに人格そのものであり、人そのものである。人は必ずしも道を行かない。しかし道は直ちに人である。よそ行きの修養には、やがて、疲労と倦怠と寂しさが残るだけである。

偽善者の戦慄

美しい虹のような空気、その中にひたつて、修養の出来たように自任した日もあつた。しかしそれからさめた。選ばれた一人者のように他人をながめ、社会をながめて、濁乱の世と悲憤慷慨した日もあつた。しかしその天使の夢からもさめた。一つの主義を高く掲げて、先駆者の如く叫んだ若き日もあつた。しかし、それには、あまりに貧弱な自分であることがわかつた。

一切の華々しい世界から自分にかえった時、寂しい自分の心が見える。地上に生れ出てから後に出来たとも思はれないほど根強い病気の根が、我が内に見える。執拗に悪にひき入れようとする灰色な重い力、深ささえ知らぬ愛欲の深淵、数さえ読めぬ悪魔の暴威、あくまで敗北すまいとする我慢の悪鬼が、他の善を見ては嫉妬し、排斥しようとする。この我慢が、我を時には弊悪卑怯の谷底につれこむ。

「女を見て色情を起す者はすでに姦淫したる者である。青年たる我らは、そんな心があつてはならない。」と言つてのける。青年よ。おん身は果してこの言葉を出し得るか。

我が眼は幾多の女を姦淫したではないか。そうした一切の心をかくして修養の衣に我が身を包む、偽善者、おお偽善者とはいつたい誰のことか。

偽善者の末路！

思つたゞけでも戦慄する。

病根

大地の上は汚されてある。大地は深い病に悩んでいる。この深い病に個人／＼がが無関係であることは出来ない。

胃病を忘れ、山海の珍味をつめこんだり、狂人が偉人の如く気取つて大言壮語したり、足の不具者が、徒歩競走に一番を夢見たりすることは、滑稽よりもむしろ悲惨である。

病人には病人の道があり、凡人には凡人の道がある。

我が身を知らぬこと、それは、私に私の道を歩ませない根本的なものである。

太鼓の音に一時的感激を造つて酔わすことは容易である。しかし、もつと深い世界に導いて、自己と社会の病根を見出し、それを抱いて、真の道を願求することは困難である。病根をおおつて、あおりたて、感激の上層に自己を忘れることは自己に忠実なる者ではあり得ない。

汝自身を知れ

「汝自身を知れ」の言葉を聞く時、ギリシャの古聖ソクラテスを憶う。

この一語、実に道徳の根源である。汝自身を知らぬ限り人は全て偽善者である。

強賊が山中に逃げた。彼がたとえ神出鬼没の術を知るとも、警察官の数を増し、それでいかなば軍隊をくり出して行けばついに捕らえることも出来るであろう。

しかし心中に現れる悪賊の群は、これを捕らえる方法なく、これを縛る綱がないとは王陽明の悲嘆ではなかつたか。

「我が身は現にこれ罪悪生死の凡夫、眩劫よりこのかた、常に没し、常に流転して出離の縁あることなし。」とは支那の聖者善導大師の機の深信であつた。

「浄土真宗に帰すれども真実の心はありがたし、虚仮不実の我が身にて清浄の心もさらになし。」とは聖親鸞の述懐であつた。

一人の夫と五人の情夫とを持ったサマリヤの女を弟子たちが罰せよと求めた時「汝等のうち罪なき者これを罰せよ。」と言ったのはキリストであった。

人を裁くのは凡人のもつ一つの特質である。それは愛なき態度である。何故に凡人が他人を冷く裁くか、それは汝自身の真相を知らぬからではないか。

他人に向けた冷いメスをまず汝自身に向けよ。

真の求道もここからはじまる。真の希望もここから生れる。真の信仰もここから生れる。

あらゆる道草と邪道と軽率と盲信と高慢と僻怠とは、我身自身を知らぬ所から生れる。